

# 野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第203号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 2021年3月21日

トラフズク



2021. 1. 1 野幌森林公園

撮影者 蓮井 肇 (江別市)



## も く じ

函館鳥通信⑤ 普通という名の幻想	バードリサーチ 三上 かつら	2
コクガン追跡3年目の軌跡 (前編)		
往復1万キロ「函館～北極圏ノヴォシビルスク諸島」ルート明らかに		
コクガン共同調査グループ 澤 祐介 (山階鳥類研究所)		4
礼文島の小学校に北海道初確認のシラコバト	一緒に行動するベニバトも	
	芦別市 鹿川 美咲	7
皇居のお濠の鳥を見ながら考える	自然と人との交点	
	東京都足立区 島崎 敦	8
2020年サロベツにおけるシマアオジの保護活動		
NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク	長谷部 真	10
私の探鳥地 伊達市 長流川河口		
貴重な地域生態系 わずかに残された自然に多様な野鳥		
	伊達市 篠原 盛雄	12
メリケンキアシシギの観察記録		
	国立極地研究所研究員 西沢 文吾	14
野鳥情報コーナー 野幌森林公園でワキアカツグミ		
	江別市 池端 耕治	15
鳥民だより 表紙の鳥		15
探鳥会あんない		16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<https://aigokai.org>)で閲覧することができます。

### 函館鳥通信⑤

## 普通という名の幻想

バードリサーチ 三上 かつら

私が渡島管内七飯町に引っ越してきたのは2014年の秋でしたが、最初の1年くらいで実感したのは、この地でみられる鳥の種数が多いということでした。もちろん、秋から冬にかけて夏鳥、旅鳥、漂鳥らは南へと渡ってしまつてさみしくなるのですが、イスカやベニヒワなど冬ならではの鳥たちに会うことができますし、水鳥の渡りもメインルートではないとはいえガンやハクチョウたちが鳴きながら飛ぶ声を楽しめます。2019年の秋にはごく短い時間とはいえハクガンが滞在したようです(2019年11月15日北海道新聞)。そしてまた春が来るとやってくる夏鳥の種数の多いこと。なんと楽しい場所だろう、と驚かされました。

そして鳥の種数だけではなく数にも驚かされました。2015年の晩夏から、七飯町の藤城にある休耕田で田中正彦さんが長年実施されている調査地での標識調査に参加するようになりました。標識調査で捕獲される鳥の数、特に秋の渡りの時期の鳥の数にはびっくりしました。とはいっても北海道には錚々たるバンダのベテランさんたちがいらっしゃって1時間に100羽、のような話は道内では珍しくないようですが、私にとってはもう「なんじゃこりゃ」でした。最初のうちは「鳥にいっぱい触れて幸せ」などと夢見心地でしたが、今では調査地でひとりの時などノゴマ、アオジ、オオジュリン、カシラダカなどは「かかりすぎないようにしよう」と早めに誘引をやめ

たり網を畳んだりするようになりました。とはいえ、秋の夕暮れ時にカシラダカの群れが空からまるで降ってくるように次々とアシ原に降りてくると、ああこれを見るのが好きだなあ、としみじみ思います。

最近は慣れてきてしまつて感覚が麻痺しつつあるのですが、振り返ると色々見る機会がありました。七飯町で、シラガホオジロやオガワコマドリ(写真1)、サバ



写真1. オガワコマドリ 2016.10.13 渡島管内七飯町



写真2. サバナシトド 2016.9.26 渡島管内七飯町、  
2羽同時に捕獲された。

ンナシトド(写真2)、セジロタヒバリは初めて触れることができましたし、幸運にも、スゲヨシキリに日本で初めて足環をつけて放すという機会にも恵まれました(Tanaka & Mikami 2017、北海道野鳥愛護会 2017)。ヨシゴイやシマクイナなども七飯町の調査地では初放鳥、という現場に居合わせましたが、実はヨシゴイは西日本ではわりと普通の鳥で触ったことも何度かありましたし、シマクイナも東北に住んでいた時に経験済みでした。もちろん滅多な経験ではないので嬉しいのですが。



写真3. ツバメ? 2020.8.8 渡島管内七飯町  
背中側はツバメのような金属光沢、頭部はショウドウツバメのようなくすんだ黒で、嘴から喉にかけては全く赤みがなく、目先の色も薄い。

あるときは脇や下面に縦斑の多いシマセンニュウ、またあるときは頭部だけがショウドウツバメに似たツバメ?(写真3)に遭遇しました。こういった変わった個体は面白いのですが、1羽を手にとるだけだと雑種(雑亜種)なのか突然変異個体なのかはわかりません。外部形態だけではわからないこともあります。将来DNA分析がもっとずっと手軽になったら、それこそSFドラマ『スタートレック』にでてきた機械のように、かざすと一瞬で、何パーセントの確率でどこのだれだ、と教えてくれるものができたら面白いですね。

いつのまにか四半世紀以上鳥に関わっていますが、何が普通なのか、何が珍しいのか、と考える基準はどんどん難しくなってきました。一応は私も研究者の端くれです。 「珍しいね、面白いね」だけではなく、それがそこで観察された意味や意義を考えます。珍しい鳥でも普通のこと、普通の鳥でも珍しいこと、普通のなかから見つける現象、いろいろあります。一つだけ見ていてはわからなくても、いくつか集まると見えてくることもあります。そして道南では、ロシアの沿海地方やサハリン、北海道内、ときにはアラスカから来たのではないかと考えられるような鳥が見られます。その上、生物分布境界であるブラキストン線(下図参照)の際でもあり、可能性がありすぎて、ちゃんぽんみたいです。それが道南の普通で、出会いには事欠きません。感覚が麻痺してきたうえ、だんだん物忘れもひどくなってきましたので、メモを取ることはなるべくさぼらないようにしようと思います。

参考: ブラキストン線(右図)

津軽海峡線ともいう。津軽海峡を隔てて南と北、つまり本州と北海道で一部の動物種の分布が異なることを意味する。発見者のトーマス・ブラキストンにちなむ。といってもベルリンの壁や北緯38度線のようなものではなく、シマエナガがときどき行き来するくらいの線です(三上ほか 2014)。



引用文献

深井宣男 2010. カムチャツカの標識調査で捕獲された鳥類の識別ノート. 日本鳥類標識協会誌 22:64-86.  
Tanaka, M. & Mikami, K. 2017. The first ringing record of Sedge Warbler *Acrocephalus schoenobaenus* in Japan. 日本鳥類標識協会誌 29:39-46.  
北海道野鳥愛護会 2017. 鳥類標識調査でスゲヨシキリとキガシラセキレイを記録. 北海道野鳥だより187:11.  
三上かつら・今兼四郎・久野公啓・佐伯元子・吉岡俊朗 2014. 津軽海峡を越えるシマエナガ. Strix 30:77-86.

コクガン追跡 3年目の軌跡 <前編>

往復1万キロ 「函館～北極圏ノヴォシビルスク諸島」ルート明らかに

コクガン共同調査グループ 澤 祐 介 (山階鳥類研究所)

「46番が帰ってきましたよ!!!」

2020年12月17日、函館在住で40年以上コクガンの観察をされている隅田重明さんから一本の電話が入りました。46番とは、2020年3月函館市根崎町で捕獲し、46番の足環と発信器を装着したコクガンのことです(写真1)。夏の間北極圏に渡り、約10,000kmの旅を終え、函館に無事に帰ってきたのです。日本で越冬するコクガンの渡りルートを追うことができたのは、初めてのこと。奇しくも12月17日は私の37歳の誕生日!忘れられない誕生日プレゼントを隅田さんとコクガンから頂くことができました(写真2)。



写真1. 函館に帰ってきた46番のコクガン



写真2. 46番を発見した隅田重明さん(右)と筆者(左)

46番は2020年3月26日に函館市根崎町の海岸で捕獲し、発信器と足環を装着しました。その後、4月26日まで函館に滞在、29日に国後島、野付湾(根室管内)に渡ります。本格的な渡りが始まったのは、6月1日。オホーツク海を一気に縦断し、マガダンを通過。シベリアの大

地を抜けて北極圏に出たあと、6月25日には北極海に浮かぶノヴォシビルスク諸島のファデエフスキー島に到着しました。夏の間はこの島に滞在し、秋の渡りが始まったのが8月21日。チャウン湾、ヘラシギの繁殖地があることで有名なチュコト半島を通り、9月26日にカムチャツカ半島東海岸のマラムヴァヤム潟に到着しました。マラムヴァヤムとは、「コクガンの潟」という意味らしく、1980年代のロシア研究者の調査で5,000羽以上のコクガンが秋の渡り時期に来る一大中継地です。そこで10月29日まで滞在し、11月1日、ついに風蓮湖まで戻ってきたのです(図1)。しかし電池の関係上、発信器は11月30日まで稼働するスケジュールとなっていました。残念ながら、46番は11月30日の発信器稼働最終日まで風蓮湖に滞在し、函館に戻ってくるところまでは追跡することができませんでした。12月に入り、寒気が入るたびに46番が移動していないか気になっていた矢先、上述の通り隅田さんが46番の足環をつけたコクガンの姿を確認してくれたのでした。

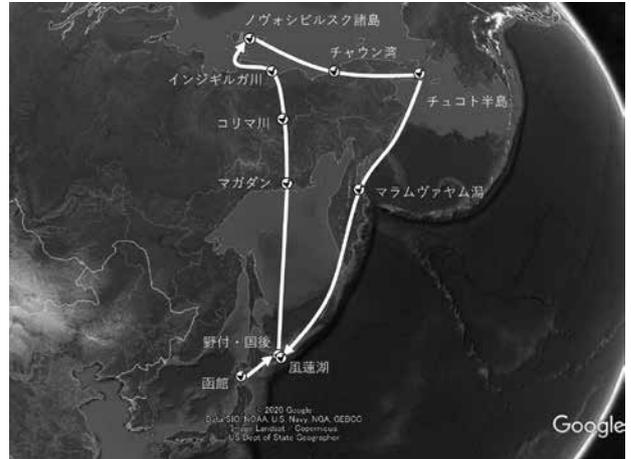


図1. 46番のコクガンの渡りルート

この追跡結果は、コクガンの研究の次なる扉を開けてくれました。コクガンの発信器による追跡プロジェクトは研究者や国内飛来各地の観察者が2017年11月から始めたもので、ここまで至るには数々の苦労がありました。本連載は2回シリーズで、今回はコクガン調査の苦労話を中心に、2回目は、調査の意義や今後の展望についてお届けします。

<どうやってコクガンを捕まえたらいいいんだ…>

コクガンに発信器や足環を装着するには、第一に捕まえないければなりません。私たちのグループが最初にコク

ガンを捕まえたのが、2017年11月の北海道野付湾でした。野付湾は、広大な湾内に最大8,000羽超のクマガンが渡ってきます。しかし、海の上におかぶか浮かぶクマガンをどうやって捕まえたらいいものか…。それが最初にして最大の難関でした。過去に東大やイギリスの研究者が当地で捕獲を試みたのですが、失敗に終わってしまい、野付湾でのクマガンの捕獲は不可能、とさえ言われていたのです。

2016年から何度か下見に行き、道東クマガンネットワークの藤井薫さんや石下亜衣紗さんに現地を案内していただき、クマガンが上陸する砂州や砂浜を案内してもらいました。が、、、ピンときません。あまりにも広い野付湾の中で捕獲できるビジョンが想像できないのです…。そうこうしているうちに、捕獲調査をする日は迫ってきます。藤井さんとは逐一連絡を取り、クマガンが上陸し、罟が仕掛けられそうな場所を報告いただいていた。しかし調査1週間前になり、藤井さんから「現在、アプローチ可能なところでクマガンが上陸している場所がありません！」と連絡が入りました。さて、どうしよう…。しばらく思案していましたが、ここでひらめいたのです。

「もう、カヤックを使って、クマガンのいる砂州まで行ってしまおう！」

実は、岸から約400mの沖合に、干潮時にのみ現れる砂州にクマガンが上陸することがわかっていたのです(写真3)。しかしアクセスが難しく、満潮時には完全に水没することから、候補にはあげていませんでした。クマガンが定期的の上陸する場所がこの砂州だけになってしまったので、なかばやけくそです。幸い、私はカヤックが好きで組み立て式のものを持っていたので、それで試してみるしかない！と思い、急遽、準備をしたのでした。



写真3. 野付湾の砂州に集まるクマガン

2017年11月18日。野付湾でのクマガン捕獲調査初日。朝から風と波が強くとでもじゃないけどカヤックは出せません。翌19日、早速カヤックで砂州まで行き、砂州の上にくくり罟という罟を仕掛けます。待つこと、数十分。クマガンが砂州にやってきますが、罟にかかる気配は全くありません。すると何かに驚いたのか、一斉にクマガンが飛び立ちました。どうやらウミネコが罟にかかってしま

い騒いだので、全て飛んでしまったようです。ウミネコを外し、再度待ちますが、クマガンはなかなか戻ってこず、潮も満ちてきたのであえなく撤収。この日は失敗。そしてその後2日間、失敗が続きます…。

なぜ捕れないのか？これまで3日間は、干出した砂州の上にくくり罟を仕掛けていました。しかしウミネコはかかったものの、クマガンからすると罟があることが見えているのでしょうか。さらに、よくよくクマガンの行動を見てみると、砂州の上の陸地に完全に上がることもありますが、まだ干出していないけどクマガンの足がつくくらいの「びちゃびちゃゾーン」をよく利用していることがわかりました。「くくり罟をそこに仕掛けることができれば…」「いや無理でしょう、すぐに波に洗い流されてしまう」。調査メンバーで喧々諤々、作戦会議の末、21日は「びちゃびちゃゾーン」にかけてみることに。しかし、というか予想通り、いざやってみると、水の中に罟を仕掛けるのは波もあるし、水も冷たくて手もげそうになるし、至難の業…。陸上に仕掛けるよりも倍以上の時間がかかってしまいました。それでも何とか、設置を終え、あとはクマガンが来るのを待ちます。そして狙い通り、ようやく念願の1羽目を捕獲することができたのです。

実はこの時の調査には、アラスカからクマガン研究者のDavid Wardさんが参加してくれていました。もし捕れなかったら…というプレッシャーが半端ない中、4羽のクマガンを捕獲することができ、無事に発信器追跡を開始することができたのです。

今では、この方法は改良に改良を重ね、数分で罟を設置、回収ができるようになりました。クマガンの越冬地である函館でも同様の罟を用いており、これまで日本では60羽以上を捕獲、標識しています。

#### <発信器での追跡。実は苦悩の日々! ?>

この捕獲方法で2017-2018年には4羽、2018-2019年には14羽、2019-2020年には5羽のクマガンに発信器を装着して追跡を行いました(写真4)。



写真4. 背中に発信器を装着した34番の個体。

1年後に帰ってきたときには発信器が外れていた。

「発信機を装着した後は、ルンルン気分！でデータが来るのを待つだけ」と思っていたのですが、むしろ心配な日が続くことになりました。

発信機を装着するという事は、鳥に負担を強いてしまうことになります。鳥たちは、空を飛ぶために体を徹底的に軽量化しています。そのため体重の変化は鳥の生活に大きな影響を与えます。鳥に発信機などを装着する場合、体重の4%以下であれば影響が少ないとされていますが、実際には、4%以下の重さでもとても気にする種とさほど気にしない種がいるのです。残念ながらコクガンはどうやら気にする方でした。発信機を装着したコクガンの位置情報をたよりに観察に行ってもらくと、1羽でぼつんといることも多く、やはり装着の影響があることが考えられました。そのような情報を聞くたびに胸をいため、位置情報が届くたびに元気かなあと気になって仕方がありません。4%という目安はあれど、できるだけ軽く、負担の少ない機種を選ばなければならないのだと痛感しました。

さらに気がかりなことはまだあります。最初のころは、追跡後1～3か月ほどで発信機からの電波が途絶えてしまうことがよくありました。発信機の負担のせいで力尽きてしまったのではないだろうかと心配することも多々ありました。中には、ずっと位置が動かないので確認にいくと、オジロワシの狩り場に発信機が落ちていたこともありました。発信機装着のせいで動きが鈍くなってしまい、天敵に狙われたのではないか…。また発信機からの通信が途絶えた後、発信機がはずれており足環だけがついていて元気に過ごしている個体も観察されました。発信機装着には、テフロン製のひもを使っていましたがその強度にも問題があるということが徐々にわかってきたのです。

### <追跡調査による二つの大きな成果>

こうしてコクガンの捕獲方法や発信機追跡での試行錯誤を重ね、苦悩の日々を過ごしていましたが、少しずつうれしい成果も出始めてきました。コクガンの渡りの謎は、大きく分けて二つあります。一つは、日本に来るコクガンの繁殖地がわかっていないこと。もう一つは、秋の渡り時に8,600羽が道東に渡ってくるのに対し、日本国内での越冬数は2,500羽と少ないこと。約6,000羽が中国・朝鮮半島に渡っていると思われるのですが、大陸での越冬地がわかっておらず行方不明になっているのです。この二つの解明のために、野付湾と函館で発信機を装着してきました。

一つ目の大きな成果は、2018年11月上旬に野付湾で捕獲し、発信機を装着したコクガンが、その1週間後に北朝鮮にまで渡っていったことです(図2)。残念ながら、北朝鮮よりも先までは追跡することはできませんでしたが、6,000羽の行方不明のコクガンの一部は大陸に渡っているということがデータで初めて示されたのです。そして

二つ目の大きな成果が46番の10,000kmにおよぶ旅の軌跡です。2014年には宮城県で発信機が装着されたコクガンがオホーツク海を渡ってマガダンに行くことがわかっていましたが、その先がわかっていませんでした。今回、初めて渡りルート全体を追うことができたのです。46番に装着した発信機は、3日間に一度GPSにより現在地を記録し、9日ごとに人工衛星を介して位置情報を通信する仕様でした。9日ごとにデータが来ているかドキドキしながら確認し、北極海のノヴォシビルスク諸島にまで行ったことがわかったときには震えました。ノヴォシビルスク諸島は日本の研究者もましてやロシアの研究者でさえ、ノーマークだった場所で、まさに“新発見”が得られた瞬間でした。さらに46番は秋の渡りも無事に完遂して、函館に戻ってきてくれ、鳥の渡りの壮大さとたくましさ感動しました。

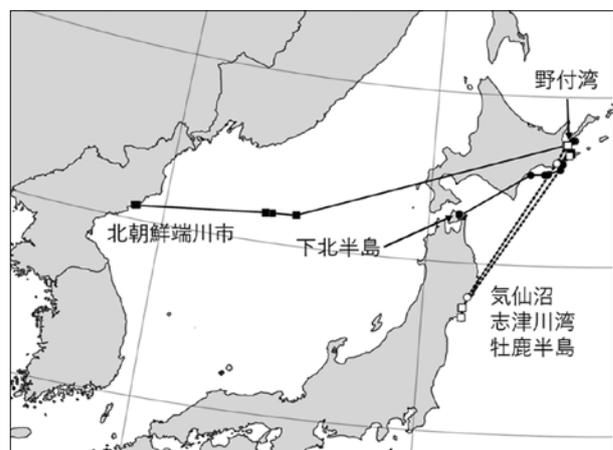


図2. 2018年の野付湾からの秋の渡り

### <花形の研究なんてない！>

この研究を始める前は、発信機を装着する研究は予算が豊富で渡り鳥研究の花形のように思っていました。しかし実際にやってみると、とても気苦労が多いものでした。常に鳥へ負担を強いていることを気にしてしまい、無事に過ごしてほしいと思わない日はありません。さらに、2017年は何とか助成金をもらうことができましたが、2018年、2019年と助成金は軒並み落ちてしまい、アメリカや中国から提供してもらっている発信機以外の研究費はすべて自腹。皆さんには金銭的負担もお願いしてしまったことを大変心苦しく思っていました。正直なところくじけそうでしたが、ここでやめたら今までの努力も鳥への負担も全て無駄になってしまうと思い、奮起してきました。ここまでやってこれたのも、調査グループのメンバーと各地でコクガンを観察してくださっている皆さま、そして何より愛嬌のあるコクガンのおかげだと思っています。今回の成果をもとに、次のステップへと研究は進んでいきます。この追跡結果がどんな意味を持ってくるのか、そして次なるステップは何なのか？それはまた次回のお話にしたいと思います。

(次号に続く)

# 礼文島の小学校に北海道初確認のシラコバト 一緒に行動するベニバトも

芦別市 鹿川 美 咲

私が宗谷管内礼文町に在住していた2020年10月21日、礼文町立船泊小学校の職員さんより、グラウンドに何か見慣れない鳥がいるという連絡がありました。全体的に白く、首を伸ばすと黒いラインが見え、嘴は黒く…。ハトのように見えたのですが、私はこんなハトは見たことがなく、図鑑を何度も何度も見返しました。後に、シラコバトだと確信(写真1)。北海道では初確認という事がわかりました。



写真1. シラコバト 2020.10.21

ユーラシア大陸や北アフリカに主に生息するシラコバトは、本州各地や琉球諸島で記録がありますが、関東北部のものは江戸時代に人為的に持ち込まれた可能性があり、埼玉県では「越ヶ谷のシラコバト」として国の天然記念物に指定されています。このシラコバトが礼文島に飛来したという事は、大陸からはるばるやってきたのかもしれない。

グラウンドが気に入ったのか、毎日地面を突く様子が見られました。採餌後もそのまま休息し、子供たちが外に出て遊ぶ際は飛び立ち、500mも離れていない近くの野球場にいたようです。全体的に灰褐色で天気の良いときは目立ちますが、曇りの日は背景のグラウンドが保護色となり、探すのが難しくなります。特徴である首の黒いラインは、直立状態や体を丸くしている状態だと見えにくく、採餌の際など首を伸ばした時にやっと見えました。ウォーキングの際は首を振りながら進み、他のハトとは変わらない様に感じました。

そして10月30日。船泊小学校の職員さんより「シラコバトにお友達が来ている」との連絡がありました。シラコバトの隣には、一回り小さい、全体に褐色がかかったハトがいました(写真2)。首の黒ラインも確認でき、ベニバトです。北海道では礼文島の隣、利尻島のみ記録があるようです。日本には数少ない旅鳥、または冬鳥として西日本で毎年確認されているとのことですが、北海道の最北の島に2度も来てくれるとは思いませんでした。



写真2. ベニバト 2020.10.30

ベニバトとシラコバトは、大体は一緒に行動していました(写真3)。頭部は褐色がかかっていて、胸・腹・上面は紫赤褐色に灰褐色も交じり、かなり暗めの色に見えました。通常、頭部は灰青色、腹・胸・上面は淡い紫赤褐色ということで、時期的にも夏羽から冬羽に換羽中であつたのかなと感じます。シラコバトよりも警戒心が強かった印象で、人が来ると1羽で先にグラウンドの奥に移動していました。



写真3. ベニバトとシラコバト 2020.10.30

2羽はグラウンドに居着き、一緒に採餌している姿、座って寝ている姿を見せてくれ、「もしかしたらこのまま越冬してくれるのかな」と少し期待をしていました。しかし、初雪が降った11月4日、先にベニバトの姿が見えなくなり、その日が最後でした。雪の降る中でシラコバトだけがグラウンドに残っていましたが、グラウンドが真っ白になった11月9日を最後に旅立ったようです。

シラコバトが飛来してから約2週間半。その途中でベニバトも合流し、なかなか見られることがないはずの2種を一緒に観察出来たことは、なんとも贅沢な時間でした。23年間、幼いころよりいつも素敵な出会いをさせてくれた礼文島に感謝し、2羽がまた一緒に来てくれる日が楽しみです。最後に、本件の情報やご教示をいただいた船泊小学校の職員さん、そして鳥情報共有のライングループ「礼文鳥」の皆様方に心より感謝いたします。

# 皇居のお濠の鳥を見ながら考える 自然と人との交点

東京都足立区 島崎 敦

私は大学生時代を札幌で過ごし、野鳥の調査研究を行っていました。これまで、野鳥だよりには「アカツクシガモ観察記録」(第170号、2012)や、「野鳥も住める都市とは?」(第182号、2015)などを書かせていただきました。大学院修了後は国土交通省で国営公園の維持管理、河川における自然再生、離島の振興などに携わり、現在は自治体の景観形成の取組みを支援する仕事をしています。また、今でも毎週末は野鳥観察に勤しんでおり、野鳥の会埼玉で探鳥会スタッフをしています。本記事では日ごろの観察や探鳥会への参加を通して、考えていることを紹介します。

私は冬になると、濠に飛来するカモたちを観察するために、頻繁に皇居を訪れます。ヒドリガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、ハシビロガモが多く、カモ類だけでもおよそ10種類ほどが、冬であればいつ訪れても観察できます(写真1)。個体数も多く、昨年の11月中旬に、半日かけてカモが多い濠中心に見て回ったところ、観察できたカモの総数は1,100羽にも及びました。



写真1. ノスリに驚き、飛び立つカモの群れ(千代田区桜田濠)

カモを例に出しましたが、カモや鳥類に限らず、皇居の自然は周辺環境と比較して傑出したものがあります(写真2)。宮内庁のホームページによれば、これまで行われた動植物の調査で、多くの新種や絶滅危惧種、都区内では絶滅したと思われていた種が生息していることが分かっているそうです。とは言え、例えば北海道の知床や釧路湿原、南方に目を移せばヤンバルの森のように、広く日本本土を見渡せば都市部から遠く離れた郊外には世界遺産や国立公園に指定されるような雄大な自然が多くあり、これらと比較すれば、皇居の自然は決して質が高いわけではなく、純粋な野生生物の生息地としての機能には大きな差があります。しかし、それぞれが生物多様性保全に果たす役割を考えると、皇居のような「都市のみどり」には大きな価値があるのではないかと

私は考えます。

東京の、特に都区内は鳥が多くありません。現在住んでいる場所は幾分ましですが、以前住んでいた山手線のある駅近くでは、駅まで歩く10分の間にスズメの声す



写真2. 皇居桜田濠 都会のど真ん中に広い緑地と水辺があることはあまり多くない

ら聞くことができず、ドバトを数羽見ることができればよい方というような状況でした。このような状況の大都市において、皇居をはじめとする「都市のみどり」というものは、人と自然との触れ合いや人が自然への愛着を持つ機会を提供しています。現に、皇居は多くの人と自然との接点を作り出しています。気軽に入れる北の丸公園や日比谷公園では平日でもランチや散策を楽しむ人の姿を多く見かけますし、休日になれば、東御苑も観光客や東京駅周辺での買い物ついでに散策を楽しむ人で混みます。濠のカモも一役買っていて、散策やランニングの休憩時に眺めているグループをよく見かけます。

読者の方々の中には、野鳥観察を通じて知り合った友人・知人を持つ方も多いでしょう。野鳥観察仲間のような「同族」との関りが多くとついつい忘れがちになりますが、世の中には野鳥や自然に興味のない人が多くいます。本当に嫌いな人から、単に興味がない人、好意的ではあるが積極的に関わりはしない人まで、その程度は様々ですが、これらの人々にどれだけ興味を持ってもらえるかが、今後、生物多様性の保全を進めていく上で鍵になって来るのではないかと思います。この考えについて、もう少し詳しく述べさせていただきます。

生物多様性の保全のためには、北海道野鳥愛護会等をはじめとした民間の団体による保護などの活動が大きな役割を果たしていますが、行政の方針や行政による価値判断も非常に重要だと考えます。行政の行いが自然を保護することも破壊することもあるほか、自然との軋轢を生む大規模な民間の行いについて許可をする権限を持っていることも多いからです。

しかし、日本には増大する社会保障費や激甚化する災

害への対応、直近で言えばコロナウイルス感染症対策等、税金をかけて対処すべき課題は多くあります。また、現代社会では様々な価値観が絡み合い、人によって考えが異なることも多いので、行政の行いが必ずしも市民全員の希望に沿うものとは限りません。例えば、少数の市民の反対があっても、それがより多くの市民の利益になるような場合であれば行政がその行いを実行するという判断をすることもあるからです。このような構造の中で、自然保護政策が多くの人々の利益にもなると判断されるためにも、自然に対するファンクラブを市民の中に一人でも多く作っておく必要があります。この考えは「自然破壊」の要因となる大規模な開発の質が変容していることを考えるとこれまで以上に重要です。

高度経済成長期以降、生物の生息地に大きな影響を与えることが多かったのは、道路やトンネル、ダムなどの社会インフラの建設や大規模な宅地開発などです。しかし、これらの数は今後、少子高齢化や人口減少による人間の活動域の縮小、社会インフラの老朽化対策費用が増大することによる新規物件の減少によりこれまでより少なくなっていくと思います。

一方で、大規模な太陽光発電所・風力発電所の建設は今後の日本で新たな自然保護上の課題となる可能性が高いと考えます。というのも昨秋の就任時に菅首相は「2050年までの二酸化炭素排出ゼロ」を目標にかけましたが、そのためにとりしている政策の中に、風力・太陽光発電等の再生可能エネルギーの活動促進が含まれているからです。

東日本大震災を経て、再生可能エネルギーの固定価格買取取り制度が創設されて以降、大規模太陽光発電所の建設やそれに伴う造成が各地で行われ、草原性鳥類を始めとする動植物との間に様々な軋轢を生じさせています(写真3)。例をあげれば、愛知県と三重県の境に位置し、チュウヒの生息地となっている干拓地において、大規模太陽光発電所を建設する計画が持ち上がったことがありました。この事例ではこれに対し、地元の野鳥の会



写真3. 草地に設置されたソーラーパネル 苫小牧市  
撮影 北沢宗大さん

等は反対意見を行政に出しましたが、条例に基づいた環境影響評価の結果を踏まえつつ、結果として建設が行われました。「2050年までの二酸化炭素排出ゼロ」という政策が実効性をもって実施されることとなれば、今後、大震災後以上にこのような事例が全国で増える可能性が

あります。

大規模太陽光発電所等の建設が従来のインフラ開発と異なる点として、再生可能エネルギーの導入も動植物生息地の保護も、大きいくくりのなかでは「環境問題を解決する手段」であることです。従来の大規模インフラ開発に際しては動植物の生息地の保護に理解を示したであろう市民の中にも、今回の問題では再生可能エネルギーの導入を優先すべきだと考える人が少なからずいるでしょう。言うまでもないことですが、二酸化炭素の排出を少なくすることは気候変動によっておこる野生生物への悪影響や大規模災害の増加、作物収量の減少等の地球規模の問題を防ぐことに繋がるからです。簡単な図式として見てしまえば、世界規模の環境課題に対処するためであれば、とある野生生物の生息地の消滅のような一地方の環境課題を犠牲にすることもやむを得ないという価値判断もあり得るといことです。

このようなことが起こらないようにするためには、個々の動植物の生息地を保全することが、生物多様性を保全することに繋がり、たとえ気候変動問題ほどでなかったとしても、重大な問題であるという共通認識を浸透させることで、再生可能エネルギー発電施設の立地検討の際に重要な動植物の生息地が外されるような社会を作っていくことが理想でしょう。しかし、これは容易ではありません。

「温室効果ガスの排出を少なくすることで、気候変動が防止され、大規模災害が起こらない」という構図は非常に分かりやすく、万人に受け入れられるものだと思いますが、「貴重な動植物(例えば北海道だとチュウヒでしょうか)の生息する草地を残すこと」がどれだけ市民の今後の生活にメリットとなるのかを簡潔に説明することは難しく、努力して説明したとしても「風が吹けば桶屋が儲かる」というような話にならざるを得ないからです。そのため、やや感情的な部分に訴えることにはなりますが、「自然が好き」「生き物が好き」と感じ、個々の動植物の生息地の保全に理解を示す人のすそ野を広げていくことが長期的に見れば個々の動植物の生息地を守る活動と同じくらい重要となると考えます。

日本の人口の多くは都市部に集中しており、都市の住民に訴えかけるには、都市においても自然・生き物と触れる場が必要となります。冒頭に紹介した皇居は首都東京を代表する都市のみどりではありますが、同じことは全国の都市においても言えることだろうと思います。動植物の「ファンクラブ」となる人を増やすために街路樹や都市公園、庭木といった都市のみどりを創出・保全し、さらには活用していくことが望まれます。

北海道野鳥愛護会をはじめとする全国の野鳥愛護組織が実施している「探鳥会」は身近なみどりを活用し、ただ訪れる場合と比較して、自然の重要さをより深く認識する機会を多くの人に与える素晴らしい取組みです。読者の皆様も、バードウォッチングという趣味を「鳥仲間」以外の人とも話題にし、興味を持ってくれる人については積極的に探鳥会に誘っていただくだけでも、生物多様性保全の一端を担うことができると考えます。

## 2020年サロベツにおけるシマアオジの保護活動

NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク 長谷部 真

2019年のサロベツのシマアオジは前年の25つがいから14つがいに一気に減少し、さえずりもほとんど聞かれませんでした。このため2020年の調査（環境省・日本野鳥の会事業）ではほとんど確認されないか、最悪の場合は絶滅の可能性も頭をよぎり、暗澹たる気持ちになりました。

繁殖期になっても気が進まないまま調査が始まりましたが、蓋を開けてみると2019年よりさえずりが聞こえ、つがい数も21に増加し安心しました（写真1, 図1）。若い雄や雌の姿と餌運びも一部の場所で確認されました。



写真1. シマアオジ雄 2020.6.04 宗谷管内豊富町

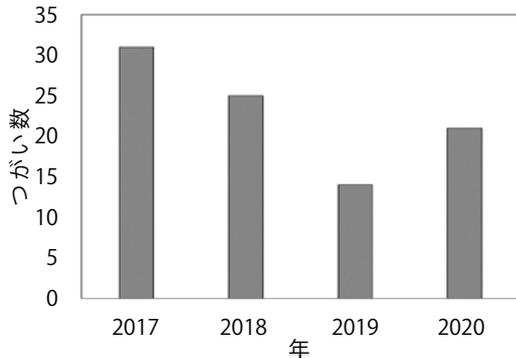


図1. サロベツのシマアオジつがい数の推移 (環境省・日本野鳥の会より)

2020年のサロベツの小鳥類の繁殖段階の進みは早かったようで、8月になるとシマアオジの姿も確認されなくなりました。この年に増加した理由は明らかになっていませんが、新型コロナウイルス感染症の流行により、中国の密猟によるシマアオジの捕獲が減少した可能性が考えられます。ただし、細かく見るとつがい数が減少した場所や、変化しなかった場所もありました。例えば、サロベツ湿原センター木道周辺では2019年よりシマアオジを観察できた期間は長かったですが、確認つがい数の増減はなく、7月になると姿が見られなくなりました。幼

鳥の姿が見られないという点では2019年の状況と変わりませんでした。

### <ササ刈りによるシマアオジ繁殖環境の改善>

サロベツでは2019年からシマアオジの繁殖環境を改善するために、ササ刈りを行っています（環境省事業）。ここでは隣接する牧草地の排水路造成事業などにより、湿原の乾燥化が進んでいました。湿原の乾燥化によるササ原化は現在も進行しており、シマアオジだけでなく、湿原の植物にとっての脅威となっています。

ササ原はシマアオジの繁殖環境として適さないため、秋の非繁殖期にシマアオジ繁殖地内の一部のササ原を刈り払い機で試験的に除去しました。ササは刈り払っても翌年に再生してくるため、湿原の植物が優占してくるまで複数年に渡り実施する必要があります。2020年は春のササが萌芽する前に湿原の植物が少し出てきましたが、その後ササに覆われてしまいました。それでも、秋にササを刈り払った際に前年よりも密度が低下していることがわかりました。

### <土地を購入しシマアオジ保護区に>

2020年に日本野鳥の会と共同で寄付を募り、シマアオジの繁殖環境の土地を保護区として購入しました（写真2）。ここは国立公園の外にありますが、湿原環境が残っており、2014年までシマアオジの繁殖が、2019年までは生息が確認された場所です。土地の現状を把握するために植生調査と鳥類相調査を行ったところ、草原性の60種の植物と15種の鳥類が確認され、良好な湿原環境であることが確認されました（日本野鳥の会事業）。保護区への購入に関する日本野鳥の会のプレスリリース発表もあり、サロベツのシマアオジについては2020年10月にNHKの「おはよう日本」で紹介され、その前後にワールドニュースでも英語版や中国語版で放送されました。



写真2. 購入したシマアオジ保護区

### <シマアオジ報告会の開催>

2020年11月28日にサロベツ湿原センターでシマアオジ報告会を開催しました(環境省事業)。シマアオジはタンチョウやシマフクロウなどとは異なり、小鳥の仲間のため知名度が低く、地元の宗谷管内豊富町でもその存在を知る人が少ないです。過去に同時期に開催されたチュウビの報告会よりも参加人数が大幅に下回っていました。

このため、今回は地元の人に知ってもらうことを念頭に豊富町役場や、町議会議員に声をかけたところ、前年度より多い23名の参加がありました。2021年度からは遠方の方も参加できるようオンライン開催も計画しています。

### <シマアオジ啓発の対外イベントについて>

2020年は新型コロナウイルス感染症流行の影響で、シマアオジの対外的な以下の普及啓発イベントが相次いで中止になりました。生物多様性会議のサイドイベント(中国・昆明)、日本鳥学会での自由集会(網走市)、ジャパンバードフェスティバルでシマアオジの展示(千葉県我孫子市)です。

一方で、12月にバードリサーチ主催の日本鳥類学オンライン大会で今後のシマアオジの保全対策についての自由集会が開催されました。2021年3月には環境省主催で改めて関係者向けのオンライン会議が開催される予定です。

### <サロベツ湿原センターでの展示・商品開発>

対外活動参加の機会が減った代わりにサロベツ湿原センターでの展示や普及啓発のためのパンフレットや商品開発に力を入れることにしました(サントリー世界愛鳥基金助成事業)。

館内では羊毛フェルトの鳥のストラップなどを販売していますが、これらを作成している作家のカムイモデルズさんに実物大のシマアオジ羊毛フェルトを作成してもらいました。羊毛フェルトは雄、雌、幼鳥を作成し、本物の巣と卵(繁殖終了時期まで放置されていたものを回収)と一緒に展示しています(写真3)。



写真3. シマアオジ実物大羊毛フェルト雄(左上) 幼鳥(左下) 雌(右上) 巣と卵(右下)

また、これまでなかったシマアオジに関するパンフレットを作成し、サロベツ湿原センターの受付で配布する予定です(環境省事業)。サロベツ・エコ・ネットワークのホームページにはシマアオジのページもあります。2020年は6月上旬までサロベツ湿原センターの木道でシマアオジが確認されなかったため、観察できなかった人や、新型コロナウイルス感染症流行の影響で来られなかった人向けに、シマアオジの動画も視聴可能にしました。また、この冬の間には展示用のポスターを新たに作成する予定です。

新商品としてはシマアオジのステッカーとトートバッグを作成しました(写真4)。ステッカーは車などに貼ってもらい、またトートバッグを普段から使用してもらうことにより、シマアオジ保護の普及啓発に役立てることが狙いです。加えて、Tシャツも作成予定です。これらの製品は関係者に配布し、商品としてもサロベツ湿原センターで販売しています(通信販売も可能ですので、サロベツ湿原センターホームページの問い合わせフォームか、0162-82-3232までお問い合わせください)。



写真4. シマアオジトートバッグとステッカー

### <今後の保全活動の方向性について>

2020年のシマアオジは前年より増加しましたが、2017年より少なく、また幼鳥が確認されていないため、2021年も油断がならない状況が続くかと思います。現在、シマアオジは国内ではサロベツのみでしか確認されていません。今後シマアオジが増加した際にいち早く保全活動が行えるよう、過去にシマアオジの生息が確認されたことがある地域との情報共有が必要です。また、地元豊富町でもシマアオジの知名度が低いため、外部からサロベツに訪れる利用者だけでなく、地元向けにも小学生・中学生等を対象としたシマアオジに関する環境教育、さらに大人向けの普及啓発などにも力を入れていきたいと考えています。

## 私の探鳥地 伊達市 長流川河口

# 貴重な地域生態系 わずかに残された自然に多様な野鳥

伊達市 篠原盛雄

内浦湾に流れ込む最大の河川である長流川（おさるがわ）は全長50km、支笏湖付近を源流として伊達市長和町に河口をひらいています。1972年9月に胆振地方を襲った台風20号によって流域で家屋浸水、農地冠水があり、これを契機に河川改修が行われ1992年に完了して現在に至っています。河口から約2kmはコンクリート護岸化され、河口の自然度は著しく損なわれてしまいました。当時、小学校3年の末娘が冬休みの自由研究として長流川のハクチョウ観察を選択したのをきっかけに一緒に長流川へ出かけたのが私の野鳥観察の始まりでした。

私は自然が好きで登山などでよく山に入っていました。長流川河口はすっかりコンクリートで固められており、全く出かける対象ではありませんでした。しかし行ってみると人工化された河口に、オオハクチョウだけでなくさまざまな野鳥がいることに驚かされました。それまで全く野鳥については興味もなく、知識もありませんでしたが、初めて出会える鳥たちに魅せられてそれ以降野鳥調査を本格的に始めることになりました。1年に200日以上観察に出かけること10年で、やっと長流川全体の野鳥の生態をだいたい把握することができました。



道内で初めて越冬したオオキアシシギ 2016.2.08

出かけるたびに新たな発見と長流川の自然の発見の連続でした。なぜこんな貧弱な自然環境のところにさまざまな野鳥がやってくるのか驚きでした。野鳥調査は長流川河口からはじまりさらに上流へ、その周辺へ、長流川の自然度を何とか維持しているのは何か調査を続けました。

長流川河口の東側には川に侵食されてきた数十mの火山灰の崖が壮瞥町まで数km続いています（11万年前の洞爺湖カルデラ噴火の堆積物）。調べてみると、その崖が保安林指定されているため自然林が残されていました。この自然林がかろうじて長流川の自然度を維持していました。25年間の野鳥調査で確認された野鳥の種数は17目52科245種となり、開発され自然度が低いエリアでなぜこれほどの種数が確認できるのか長流川周辺の自然の

再評価、その役割について再考せざるを得ませんでした。ふとしたきっかけで入った鳥見の世界は野鳥の発見の楽しみだけではなく、開発される以前の地域の自然、長流川が果たしてきた地域生態系の役割、野鳥の中継地としての地理的位置、越冬地としての地形的、気候的条件、長年自然観察を続ける中、気候変動の影響等、記録調査から見えてくる世界は広がっていきました。さまざまなことを長流川から学ばせてもらいました。



西胆振地方初のハクガン 2020.10.31

伊達市においてもこの150年で、残された原始林は皆無です。自然保護の思想も、法的な整備も非常に不十分なままで今現在もさまざまな開発行為が行われています。近年はCO<sub>2</sub>削減と称して、巨大な風車建設がすすめられ、森林伐採までされて太陽光パネルが至るところに建設されています。

野鳥観察したいがためにそれらの建設に反対しているわけではありませんが、わずかに残された地域の生態系を何とか守るために悪あがきをしないわけにはいかないほど、残すべき地域生態系の破壊が進行しています。

長流川河口西側は1985年に志村化工の工場跡地が整地された後、30年以上放置されていました。その後シラカバ、ヤナギ類、ドロノキ、ケヤマハンノキなどを中心に森林が再生していましたが、2016年突然太陽光パネル設置のため皆伐、整地されてしまいました。長流川河口が自然保護エリアではないため開発行為は自由でした。



西胆振地方初のハシブトアジサシ 2020.7.28

2014年10月から何とか河口から高速道路まで銃猟禁止区域の指定を受けて、ガンカモ、ワシ類の越冬に対する発砲による大きな負荷はなくなりましたが、長流川が自然保護区として自然再生のエリアとなるのは程遠い現状です。とても優れた探鳥地として推すことのできない現状となっていますが、西胆振地方で残された最後の砦としての人工化された長流川に野鳥たちはやってきています。

長流川河口で鳥見をする場合、河口近くに架かる新長流川橋の東側に少し駐車スペースがあります。橋の上には広い歩道がありますので橋から野鳥観察が可能です。橋を渡り西側の堤防に車一台分の道がありますので堤防の上を河口まで車を入れることも可能です(奥に数台駐車できます)。



4月の長流川河口

長流川河口はオオハクチョウ、マガン、コクガン、カモ類、オジロワシ、オオワシの越冬地です。オオハクチョウは近年300羽程度、マガンは100羽程度越冬し、マガンの群れの中にヒシクイ、カリガネ、シジュウカラガン(亜種ヒメシジュウカラガン)が交っていたことがありました。最大時でオジロワシ40羽、オオワシ30羽ほどが越冬していますが、気候変動による気温、水温の上昇によるサケの遡上の減少で、近年滞在期間が短くなっています。

冬は時々、コミミズク、ハイイロチュウヒ、ケアシノスリなどが観察されることがあります。ここ数年、ダイサギの越冬が数羽見られようになりました。3月上旬になると北上組のガンカモ類も加わり多い時には3,000羽ほどにもなり、早朝の河口は非常ににぎやかになります。

3月から5月、9月から10月にかけては渡りの中継地となっていますので、シギ・チドリをはじめ珍しい鳥の飛来もあります。ツバメチドリ(1998年5月)、ヒメハジ



クビワキンクロ 2014.4.23

ロ(2002年3月)、ツメナガセキレイ(亜種マミジロツメナガセキレイ 2003年5月)、ヘラサギ(2005年5月、

2020年4月)、サンカノゴイ(2006年4月)、クビワキンクロ(2006年6月、2014年4月)、ミヤコドリ(2006年10月、2016年4月)、マナヅル(2006年10月)、メジロガモ(2009年5月)、ダイシャクシギ(2010年4月、2011年3月)、チュウシャクシギ500羽(2010年5月)、ユキホオジロ(2011年2月、2017年1月)、ホシムクドリ(2011年2月)、ハシグロクロハラアジサシ(2012年8月)、カリガネ越冬(2014~15年)、カラシラサギ(2015年7月、2020年7月、8月)、オオキアシシギの道内初越冬(2016年1月~2月)、ツクシガモ(2018年5月)、ハシブトアジサシ(2020年7月 西胆振地方初)、ハクガン(2020年10月 西胆振地方初)など、長流川河口は鳥たちの中継地として、重要な地理的な位置にあると考えられます。

人工化された河口ですが、夏になると河口の草原、ヨシ原にヒバリ、ノビタキ、ホオアカ、オオジュリン、オオヨシキリ、コヨシキリなどが繁殖し、そのほかカルガモ、マガモ、カワアイサ、オシドリ、カイツブリ、カワラヒワ、カラ類、カワセミ、ハヤブサ、ミサゴ、カモメ類、カワウなどが観察できます。自然保護区ではないため、サケ釣り、砂州への車の乗り入れ、犬の放し飼い、河口の中州へのモトクロスバイクの乗り入れ、ごみの不法投棄、カメラマングループによる珍鳥の追い回し等、河口の生態系にさらなる負荷がかかる状況にあることは残念なことです。



カラシサギ 2020.7.09

2008年、生物多様性基本法が施行され、国、地方公共団体に生物多様性戦略策定が義務づけられ、地域生態系の保護がやっと実現できるかと期待していたのですが、13年たってもいまだに地域生態系保全のための生物基本調査すら始める気配はありません。

巨大風車建設時の環境影響評価はその理念を無視して、評価書を手続きに従って作成さえすれば、どこにでも建設可能となるような行政が行われています。自然保護の法律はあっても、どんな社会をつかっていくのか志がなければ、地域生態系の破壊行為は続いていきます。鳥の観察を通して、人間社会の在り方そのものを根本的に再検討しなければならない時期に来ているとつくづく考えさせられています。長流川河口は私にとって人生の方向を指し示されることになった出会いでした。

## メリケンキアシシギの観察記録

国立極地研究所研究員 西 沢 文 吾 (函館在住)

2019年5月20日午前11時頃に道南の渡島管内森町にある漁港でメリケンキアシシギ1羽を観察しましたので報告致します。メリケンとは“アメリカの”という意味で (Americanがメリケンと聞こえたことによる)、その名が表すように、主に北アメリカ (アラスカやカナダ西部) の亜高山帯で春から夏にかけて繁殖します。繁殖が終わると、アメリカ南部、ハワイ諸島やソロモン諸島などの太平洋南部の島々、およびオーストラリア北東部の海岸まで南下し、そこで越冬します。関東や東海地方の太平洋側の海岸や岩礁地帯では、毎春観察されますが、北海道ではとても珍しい種類です。

その日は天気も良く、朝から森町の漁港で釣りを楽しんでいました。すると、1羽のシギが漁港の外海に面したテトラポッドにとまっているのを発見しました。肉眼で見た第一印象は、体型はキアシシギによく似ていましたが、全体的に黒っぽく感じました。これはもしか…? と思い、あわてて車に積んであった双眼鏡と望遠カメラをとりに行きました。双眼鏡で観察するとすぐにメリケンキアシシギだとわかり、その後しばらく観察と撮影を続けました。私は、以前関東に住んでいた頃に、千葉県



写真1. メリケンキアシシギ 2019.5.20 渡島管内森町



写真2. メリケンキアシシギの嘴の拡大図. 鼻孔から続く溝は嘴の半分よりも長い (矢印)

の海岸でメリケンキアシシギを何度か見たことがあったので、その特徴もよく覚えていました。メリケンキアシシギは、北海道でもごく普通に観察されるキアシシギに似ています。両種の識別ポイントとして、メリケンキアシシギはキアシシギに比べて、①背中 of 灰色がより濃く、②胸の横斑はより太く、下尾筒まで密にあり、③嘴は基部までほぼ一様に黒く、鼻孔から続く溝は嘴の半分よりも長い (キアシシギでは嘴の半分程度) ことが挙げられます (写真1、2)。観察中には、「ピッピッピッピッピッ」と鳴きながら飛翔し、テトラポッドの間を少しずつ移動しながら、フナムシを見つけて食べていました。この鳴き声もキアシシギとの重要な識別点となり、キアシシギがよく発する「ピューーピューー」とはかなり異なります。また、両種の利用環境の違いも識別のヒントになるでしょう。メリケンキアシシギは海岸の岩礁地帯や磯、テトラポッドを好みますが、キアシシギのように砂浜や河口、水田、内陸の湿地に入ることはありません。

北海道においては、これまでに2例の観察記録 (1967年1月根室市と1979年5月釧路管内浜中町) と色丹島における1例の採集記録があります。しかし、いずれの観察記録においても写真は残っておらず、今回の観察が写真を伴う確実な記録になりました。

これらの北海道での記録も含めて、国内でのメリケンキアシシギの記録は5~6月の太平洋側に集中しています。また、千島列島で5~6月に採集された4標本が山階鳥類研究所に所蔵されています。これらのことから、メリケンキアシシギの一部は、太平洋南部の島々やオーストラリアなどの越冬地から、本州と北海道の太平洋側、千島列島を経由して、シベリア東部やアラスカの繁殖地へと北上しているのかもしれませんが。

特に、春の北海道太平洋側の岩礁地帯や漁港では、キアシシギとメリケンキアシシギの両方が見られることがあるかもしれません。両種の識別点をもう一度おさらいし、みなさんもフィールドでの嬉しい出逢いに期待しましょう。

### 参考文献

- 藤巻裕蔵 2012. 北海道鳥類目録改訂4版. 極東鳥類研究会, 美唄.
- 西沢文吾 2020. 北海道におけるメリケンキアシシギの記録. *Strix* 36:41-45
- Hayman, P., Marchant, J. & Prater T. 1986. *Shorebirds. An identification guide to the waders of the world.* Christopher Helm, London.
- ネチャエフ V.A., 藤巻裕蔵 1994. 南千島鳥類目録 (国後, 択捉, 色丹, 歯舞). 北海道大学図書刊行会.

# 野鳥



## 情報コーナー

### 野幌森林公園でワキアカツグミ

江別市 池端 耕治



ワキアカツグミ 2020.12.07 野幌森林公園

2020年12月7日午前10時8分頃に江別市の野幌森林公園で迷鳥のワキアカツグミ (*Turdus iliacus*) と出遭いました。場所は、探鳥会の時の集合場所の大沢口から中央線を南に400mほど行ったところの右側のナナカマドが混在するシラカンバ林です。

ただ、見つけた時は小さめのツグミだな〜としか思わず、近くに居たハチジョウツグミに気を取られて観察したのはごく僅かな時間でした。家に帰って画像をチェックし、ワキアカツグミだと分かったのです。全長は20~21cmとツグミより小さく、体の脇と下雨覆が赤褐色、上面はオリーブ褐色で下面は白っぽく黒い縦斑があります。翌日以降も同所で探索し、12月9日の午前8時30分に再度見つけ観察しましたが、ノスリの飛来のためか飛び去り、以来見ることはできませんでした。

北海道での過去の観察記録については、北海道野鳥だよりに5例記載されています。また、昨年末から今年の1月にわたって札幌市南区の道立真駒内公園に1羽が滞在しているのが観察されています。

## 鳥民だより

### ◆野鳥写真展と写真募集のお知らせ◆

会場：ほくでんギャラリー  
札幌市中央区大通東1丁目2  
北海道電力株式会社1F

期 間：2021年5月10日(月)～5月21日(金)

展示時間：9：00～17：00 (土・日・祝は休館)

(ただし初日は13：00から、最終日は15：00まで)

応募要領：最近3年以内に原則、北海道内で撮影したもので、四つ切、デジタル写真はA4版。鳥の名前・撮影者・撮影年月・撮影場所を必ず添付のこと。原則1人2枚以内とし、3枚以上の場合は展示優先順位を明記してください。

募集締切：4月30日(金)までに、下記の当会事務所に送付または持参してください(必着)。

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル5  
六階 北海道自然保護協会気付 北海道野鳥愛護会

お願い事項：作品は当会ホームページに掲載しますので、JPEGデータをメール添付で下記に送付してください。

総務 辻幹事 E-Mail：mtsujj@eagle.ocn.ne.jp

※写真展は6月1日(火)～30日(水)まで野幌ふれあい交流館でも開催予定です。

### ◆総会のご案内◆

日 時：2021年4月14日(水)14：00～

場 所：かでの2・7 110会議室(1階)

(札幌市中央区北2条西7丁目)

【お問い合わせ】 畑 正輔 (011-894-0017)

### 【新しく会員になられた方々】

小澤 聡美(札幌市中央区) 石留 一人(札幌市北区)

### 茨戸川緑地 “お試し探鳥会”のお知らせ

日 時：2021年6月5日(土) 9：00～11：30

集 合：茨戸川緑地管理事務所前

札幌市北区篠路町拓北298(駐車場隣接)

交 通：自家用車またはJRあいの里教育大から  
タクシー利用(約3km)

茨戸川と石狩川に囲まれた茨戸川緑地は、ノビタキ、オオジュリン、ベニマシコ、コヨシキリ、オオヨシキリなどの草原の鳥を見ることができます。カッコウの声も聞かれ、アリスイなどが姿を現すこともあります。初夏の季節に“お試し探鳥会”として企画しました。管理事務所には休憩所、トイレ、自販機もあります。場所はインターネットで「茨戸川緑地」と検索、確認してください。また、地図を含めた案内を本会ホームページの「お知らせ」欄に掲載します。  
※新型コロナウイルス感染症の状況により中止の場合があることをご了承ください。

### 表紙の鳥

### トラフズク



ここ数年、毎年行っている元日の野幌森林公園探鳥に今年も妻と出かけました。いつもどおり大沢口から入ったところ、いきなりクマゲラをじっくり観察できて良い一年のスタートが切れたと上機嫌で奥に進みました。

しばらく歩いていると視界の左斜め前方、目線より少し高い枝に黒い鳥影がとまるのが見えました。双眼鏡で確認すると容姿はフクロウ、虹彩はオレンジ色、素敵な羽角がはっきり確認でき『あっ！トラフズク』と心で叫びました。ちょうどネズミを捕まえて枝にとまった瞬間が視界に入り、超ラッキーな元日でした。  
蓮井 肇 (江別市)



- ☆ 探鳥会は、どなたでも参加できます。参加費無料。事前申し込み不要です。直接現地に集合してください。昼食、双眼鏡等観察用具、筆記具などをご持参ください。
- ☆ 集合場所等については、愛護会ホームページ「探鳥地紹介」でお確かめください。
- ☆ いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。
- ☆ 探鳥会の開催を変更・中止する場合がありますので、愛護会のホームページでお確かめください。
- ☆ 交通機関の運行時刻等については、最寄りの営業所等にお問い合わせください。
- ☆ 探鳥会の問い合わせ先  
北海道自然保護協会 ☎011-251-5465 10:00~16:00 (土・日曜、祝祭日を除く)  
**新型コロナウイルス感染症の状況により中止の場合があることをご了承ください。**

開催日	探鳥地	集合場所及び集合時刻
4月11日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前 9:30
	中央バス：地下鉄東豊線環状通東駅発（北札幌線東69番・東79番）「モエレ沼公園東口」下車、徒歩10分。開水後の沼に浮かぶカモ類やオオバンなどの水鳥群、沼畔湿地草原や公園林の小鳥類を楽しみます。	
4月18日(日)	宮島沼	湖畔 10:00
	中央バス：岩見沢ターミナル発（月形線21番）「大富」下車、徒歩15分。北への渡り途中のマガンたちが集結します。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。暖かい服装で。	
4月25日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	JRバス：新札幌駅発（文京台循環線）「文京台南町」下車、徒歩10分。夏鳥たちが渡ってくる時期です。木々の芽が開き始めた森の中を、鳥たちのさえずりを聞きながら歩きます。	
5月5日(水)	藤の沢	白鳥園（エルクの森パークゴルフクラブ向い） 9:00
	定鉄バス：札幌駅発又は地下鉄真駒内駅発（定山溪温泉行又は豊滝行）「藤野3条2丁目」下車、徒歩15分。藤の沢小鳥の村とその周辺をウグイスやオオルリなどの声を聞きながらゆっくりと巡ります。	
5月9日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	4月25日の案内を参照してください。木の間に見え隠れするキビタキ、梢でさえずるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月16日(日)	千歳川	さけます情報館手前の第一鳥欄舞橋付近の河畔園地 8:00
	公共交通機関はありません。千歳川沿いに発電所ダムまで行きます。たくさんの夏鳥が見られます。ヤマセミが出現することもあります。	
5月23日(日)	鶴川河口	道の駅むかわ四季の館駐車場 9:45
	道南バス：札幌駅前又は大谷地バスターミナル発（浦河行/ペガサス号）「四季の館前」下車。鶴川河口と人工干潟のシギ・チドリ類がメインです。時にはチュウヒやハヤブサも現れます。	
5月30日(日)	野幌森林公園	大沢口 6:00
	早朝のため公共交通機関はありません。早朝探鳥会です。夏鳥の囀りを聞きながら早朝の森を歩きます。春の草花も真っ盛りです。	
6月6日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅前 9:10
	JR千歳線「植苗」下車。鳥の囀りを聞きながら植苗駅からウトナイ湖へ向かいます。道沿いの林や湖畔の草原で夏鳥を楽しみます。	
6月13日(日)	厚別川	川下公園駐車場 9:00
	中央バス：地下鉄東西線白石駅発（川下線白24番）「川下公園」下車。厚別川の堤防を歩きます。カッコウの鳴き声や姿も期待できます。草原の鳥が勢揃いし、林の鳥たちも楽しめます。	
6月20日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	4月25日の案内を参照してください。鳥たちにとって一番忙しい子育ての季節です。初夏の花も咲きそろい、鳥と野の花の両方を楽しめます。	
6月27日(日)	福移	福移小中学校前 9:00
	中央バス：地下鉄環状通東駅発（北札幌線）「福移小学校通」下車、徒歩5分。石狩川堤防沿いの草原や石狩川・豊平川合流点の鳥を楽しみます。	

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人 2,000 円、家族 3,000 円(会計年度 4 月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465

HPのアドレス <https://aigokai.org>